

## 4. 特別支援教育コーディネーターに関する教師の 実践的な行動形成への支援

—特別支援教育コーディネーター実践講座3年目の取組から—

特別支援教育専修	平澤紀子
	神野幸雄
	池谷尚剛
	坂本裕
	廣嶋忍
	谷崎毅
学校教育専修	大井修三

### I はじめに

学校教育法等の一部が改正され、平成19年4月から、特別支援教育の本格的な実施が決定している。現在の盲・聾・養護学校は特別支援学校として、小・中学校等の要請を受けて、教育上特別な支援を要する児童生徒等の教育に必要な助言や援助を行う。小・中学校等においては教育上特別な支援を要する児童生徒等に対し、障害による学習上または生活上の困難を克服するための教育を行うこととされている<sup>1)</sup>。

その推進・調整役を担うのが、特別支援教育コーディネーターである。岐阜大学教育学部附属特別支援教育センターでは、平成16年度から、岐阜県教育委員会と連携し、自治体による単発的な研修では難しい、実践力の向上を目指した継続的な研修の場として「特別支援教育コーディネーター実践講座」を開催している（平澤・神野・池谷, 2006<sup>2)</sup>）。

この実践力については、受講者のスキルアップという側面だけでなく、それを学校現場で発揮できるような環境整備の面からも考える必要があるだろう。そこで、本報では、講座3年目の取組から、学校現場の実践を題材とした演習と、現場教師との協働的实践を通じた校内体制や地域支援体制の構築について取り上げ、特別支援教育コーディネーターに関する教師の実践的な行動形成への支援に向けて、大学スタッフが果たすべき役割について考察したい。

### II 平成18年度特別支援教育コーディネーター実践講座の概要

平成18年度の講座は、66名の受講者（盲・聾・養護学校34名、小学校27名、他5名）である。2年継続の受講者は7名、3年継続の受講者も2名いる。

講座は、①岐阜県教育委員会スタッフから県の実情や求められる役割を学ぶ講義から開始し、②学部スタッフから専門知識を学ぶ講義、③全国的講師から最前線の知識を学ぶ講演、④学校現場の実践から課題整理力を学ぶ演習から構成している。また、今年度は、TV会議システムを通

じて県の特別支援学校への配信も試行している。

表 1 平成18年度の特別支援教育コーディネーター実践講座

---

① 7 / 15 (土) 10:00-12:00 「平成17年度の研究成果公開 (公開講座)」
助言者：岐阜県教育委員会特別支援教育課 課長補佐 安田和夫氏
② 7 / 15 (土) 13:00-14:00 「講義：特別支援教育コーディネーターの役割」
講師：岐阜県教育委員会特別支援教育課 課長補佐 安田和夫氏
③ 9 / 21 (木) 16:00-17:30 「演習①：校内資源の活用と外部機関との連携」
④ 10 / 11 (水) 18:30-20:00 「演習②：保護者との協力関係の形成」 TV会議システム
⑤ 10 / 21 (土) 10:00-12:30 「講義：読み書き障害の理解と支援 (公開講座)」
講師：岐阜大学教育学部助教授 廣瀨忍氏
⑥ 12 / 2 (土) 13:00-15:00 「講演：特別支援教育を推進する具体的なアクションのために：行動分析的アプローチ (公開講座)」
講師：兵庫教育大学教授 藤田継道氏
⑦ 1 / 25 (木) 16:00-17:30 「演習③：支援体制の継続に向けた引き継ぎ」
⑧ 3 / 3 (土) 10:00-12:30 「講義：障害のある子どもの暮らしと子育ての支援 (公開講座)」
講師：岐阜大学教育学部教授 富岡卓博氏 池谷尚剛氏
⑨ 3 / 3 (土) 13:30-15:00 まとめ・修了式

---

とくに学校現場の実践を題材とした演習では、県主催の研修会でも行われているロール・プレイ演習を取り上げ、①課題を整理し、解決のための手だてを見いだす、②関係者と協議したり、まとめることを目的として、表2の手続きで行っている。

表 2 ロール・プレイ演習の手続き

---

・小グループに分かれて、各役割(特別支援教育コーディネーター、学級担任、学年主任、関係教員、管理職、保護者)を決める。
・学校現場の実践を題材として、一定時間下で、課題整理シートを基に課題を整理し、解決方法を協議する。
・特別支援教育コーディネーターの受講者は、協議を推進し、まとめる。
・各役割の受講者は、その立場から意見を述べる。
・協議を推進するために、どのような点に考慮すればよいかを話し合う。
・特別支援教育コーディネーターの受講者は、題材に関する課題整理の結果とともに、協議を推進するための考慮事項について発表する。
・上記の結果について全体で討論し、特別支援教育コーディネーターの役割を遂行するために考慮すべきことを要約する。

---

どのような視点で課題を整理し、解決への手立てを見いだせばよいかについては、表3のような学校現場において教師と大学スタッフとの協働的实践を通じて開発している課題整理シートを使用して、演習している。

表4に、1回目の演習(9/21)で受講者から意見や感想を記入してもらった結果を示した。このような演習を継続的に実施することによって、関係者と協議しながら課題を整理し、解決の手立てを見いだすためのポイントは学習されるようである。一方、最後の意見に示されるように、現状では研修成果が生かせない場合もあり、研修とともに学校現場において特別支援教育コーディネーターが役割を果たせるような校内体制づくりがあらためて必要なことが分かる。

表3 課題整理シート

- ・問題の具体的な状況：
- ・対象児の参加できていること、得意なこと、好きなこと：
- ・現在の対応・支援体制と成果：
- ・緊急対応として問題を防ぐために、誰が、どこで、何をするか：
- ・支援者の付き方（随時大人がついて、行動を規制しない）：
- ・周囲が困る行動への対応（対象児の困った状況の理解）：
- ・対象児の困った状態や要求を読みとる手がかり：
- ・対象児への手だて（見通しを持たせる説明や提示、得意なこと、好きなことを参加に生かす、達成感が得られるようにする）：
- ・保護者への対応：
- ・支援ポイントと役割分担の確認、次回の日程：

表4 ロール・プレイ演習に関する受講者の意見や感想の抜粋

- ・一定時間内で、できること、できないことを明確にして話しを進める必要がある。
- ・問題だけでなく、担任の指導の成果を明らかにすることが大切である。
- ・どんな意見も否定しないことによって、話しやすい雰囲気になる。
- ・否定的な意見からも、前向きな提案を引き出すことが重要である。
- ・対象児の状況が難しいほど、今できていることに目を向けた支援の組み立てが重要。
- ・盲・聾・養護学校の立場から、小学校の状況が分かり、参考になった。
- ・課題を整理する際のポイントが明らかになった。
- ・立場により、様々な意見があり得ることがあらためて分かった。
- ・特殊学級のコーディネーターの立場では、意見を言いにくい状況がある。

### Ⅲ 小学校における協働的实践を通じた校内体制の構築

特別支援教育コーディネーター実践講座に参加した教員と連携し、筆者が小学校における協働的实践を通じて校内体制の構築にかかわった事例として、H小学校の事例を取り上げたい。

筆者がH小学校とかかわることになったのは、昨年度の1学期の終わり頃、1年生の学級担任の先生がA児の保護者に当センターへの相談をすすめたことによる。A児の保護者の話では「学校での学習についていけない。担任の先生は個別の配慮をしてもらい、とてもよくやってもらっている。親として焦りや不安があり、相談する場として、担任の先生に教えてもらった」ということだった。後日、学校から電話があった。担任の先生は前任校で特殊学級の担任をしており、そこでよく相談をしていた地域の幼児療育センターのスタッフから、筆者をすすめられたそう。当センターでの月1回の教育相談を継続していき、学校側から適時電話での相談を受ける形で連携していった。

2学期には筆者がA児の通常学級の授業を参観した。A児には軽度の知的発達の遅れがあり、国語、算数等の授業を同じように取り組むことは難しかったが、随時A児が取り組めるような工夫と配慮がなされていて、A児なりに学習活動に参加し成就感が得られていた。しかし、他の子どもたちとの能力的な差は広がり、本人の学習意欲が低くなってきていることも確認できた。参観後、コーディネーターを兼務している特殊学級の先生と担任の先生と話し合い、今後、特殊学級への通級を保護者にすすめていくことを確認した。保護者には抵抗感があったが、これまで通

常学級の中でできる限りの支援を行っていたこととコーディネーターとして特殊学級の先生が保護者の相談にあたって信頼関係ができていたことがよかった。最初は、週1回の通級を開始することになった。センターでは学習の補償ではなく、筆者とA児だけでなく保護者にも入ってもらってゲームや遊びを行い、親子にとってまず楽しい場所にし、保護者の不安に耳を傾け子どもの実態を受容していきけるような精神的サポートをこころがけた。

こうした担任、コーディネーターとの話し合いは校長室で行われた結果、校長先生にも聞いてもらう形になった。校長先生は、短い時間の筆者との帰り際の懇談で、A児や保護者、そして担任や特殊学級の先生の取り組みを肯定的に見て下さることが伝わり嬉しかった。

コーディネーターの先生は、今年度、センターの実践講座を受講してくれた。また、センターからお願いし、通常学級に在籍する特別なニーズをもつ子どもの支援について、協働の実践研究を行うことになった。特別支援教育コーディネーターが学級担任と相談し、通常学級に在籍する児童の中で担任が指導やかかわりに困り感をもっている子どもを5名抽出してもらった。そして、筆者が学校を訪問し、実際の授業場面を参観して、放課後、コーディネーターも入って担任と支援のあり方について話し合った。

学校から依頼され、こうした相談にあたるのが、最近増え、これまでたくさんの学校を訪れ貴重な経験を得ている。コーディネーターは特殊学級の先生であることが多い。そうした場合、たいてい教務主任か生徒指導の先生が筆者を案内してくれるのだが、学級担任に聞かないとその児童が誰でどこに座っているかわからないということがよくあった。H小学校では、校長先生が案内してくれた。校長先生は教室に入ると子どもたちを見て、その場の白紙のメモにさっと席次表を書いて子どもの位置に印をつけ、筆者に教えてくれた。すべての学級でそうだった。そのことに筆者は感心した。また、校長先生は授業が終わるまで筆者と一緒に参観してくれた。

授業の合間の休憩時間に校長室で一緒にいると、ひっきりなしに子どもたちがやってきた。自分ががんばって取り組んだことを校長先生にみてもらいに来るのである。子どもらは、練習をして吹けるようになったりコーダーや漢字の練習帳が1冊終わったもの等をみてもらっていた。それを確認すると校長先生は、机からご自分のニコニコした似顔絵が描かれている「ねばり玉」カードを1枚渡し、子どもはそれをもって嬉しそうに帰っていく。筆者は、子ども一人ひとりを大切に教育に学校全体で取り組んでおり、校長先生がそれを自らの行動で示していることに感動した。また、このとき抽出された児童に校長先生がしっかりかかわっている。ある児童は転校してきた当初、教室で自己主張しひどく怒って興奮し担任だけでは対応できなかったが、校長室に行き校長先生に言い分を聞いてもらうことでクール・ダウンし、自分の教室に戻っていったようだ。

午後から校長先生は校外に出張に行かれ、担任の先生との懇談はコーディネーターの先生も入って、3人で行った。2学期、もう運動会も過ぎており、先生方は困難さをもった子どもたちを実践の中で試行錯誤しながら対応の仕方をみつけだし、学級集団の中に位置づけていた。筆者とコーディネーターは、そのうまくやれている部分を確認し、今後の見通しを一緒に検討するようにした。本来、特殊学級の担任は校内全体を把握することの難しさがある。しかし、このような協力関係ができている場合、コーディネーターとしての役割を果たすことができるだろう。2学期中に二度、協働実践の機会をもったが、好評で3学期にもう一度、筆者が訪問し同じ形で

通常学級の授業参観と学級担任との懇談の場をもつことになった。学校全体で子ども一人ひとりを大切にする日小学校の取り組みから、学校が主体となって特別支援教育のための校内体制を構築・整備を行っていくための大学スタッフの支援の在り方について学んでいる。

#### Ⅳ 盲学校における協働的实践を通じた地域支援体制の構築

##### 1) 岐阜盲学校の地域支援体制の沿革

岐阜県立岐阜盲学校は、本県における唯一の視覚障害教育機関として視覚障害に係わる様々な支援の要請に応えてきている。昭和57年度から実施された「幼児教室」を嚆矢として、平成7年度からは「定期教育相談」と「目の不自由な子のための相談会」を実施し、平成9年度からは「教育相談」担当者によって全校体制で取り組むことになった。そして、特別支援教育への転換に向けて、平成14年度に教育・医療・福祉等の関係機関との連携を深めるため「視覚障害教育相談担当者会」を設置し、「訪問教育相談」と「巡回視覚障害教育相談会」をスタートさせた。さらに、平成16年度には校務分掌として「特別支援教育部」及び「特別支援教育コーディネーター」を置いて、組織的に「地域の視覚障害支援センター」としての活動を行ってきている。

##### 2) 岐阜盲学校の関係機関との連携

平成14年度にスタートした「巡回視覚障害教育相談会（平成16年度からは「目に関する相談会」に改称）」は県内6地区に出向いて個別相談会、学習会、点字／盲導犬体験、生活便利グッズ展示等を行っている。スタッフは、盲学校教員を中心に、医療関係（眼科医／視能訓練士／眼鏡士／光学機器メーカー）、福祉関係（歩行訓練士／盲導犬訓練士）、教育関係（岐阜大学障害児教育講座教員等）が協働して参画している。

岐阜盲学校の特別支援教育コーディネーターは平成14年度からこの「巡回視覚障害教育相談会」の中心メンバーである教員が指名されていて、本講座には初回から参加して、毎年その概要を報告していただいている。他の参加者にとっては、①関係機関の連携／協働及び②特別支援教育コーディネーターの役割の2点から、特別支援学校が地域のセンター化を推進する取り組みのモデルとなっている。

この「巡回視覚障害教育相談会」では、①視覚に障害のある幼児・児童生徒・成人及び関係機関職員の育児、学習、生活などに関する相談、②視覚障害に関する学習・体験活動を実施することによる広報啓発、③関係機関職員の相互の情報交換と連携、の三つを目的としている。従って、視覚障害に関する個別相談の参加者（平均20件50人程度）に加えて、それぞれの地域の小・中学生や一般の方々が150～200名程度参加して、様々な学習や体験を通して視覚障害に関する理解を深めている。これから特別支援学校が地域のセンターとなるためには、障害のある子どもへの直接支援は言うまでもないが、こうした子どもたちを地域で支えてくれる子どもたちに、障害に関する学習や体験を積み重ねていくことができる機会を提供する「地域づくり」も大切である。

また、盲学校ではこうした関係機関の職員との連携／協働的实践を行うために、啓発資料を毎年1400カ所に配布している。さらに、特別支援教育コーディネーターが開催地区の市町村教育委員会や小・中学校に直接訪問して参加を促したりしている。関係機関からのスタッフ参加は、眼科医では各地区ごとの眼科医会、眼鏡士は県眼鏡士組合の協力を得ている。さらに福祉関係や

光学機器メーカーまでと多様な職種を含む連携は、盲学校を基点とした視覚障害に係わる地域のネットワークが長い期間育んできた財産でもある。詳細については、池谷ら（2004）<sup>3)</sup>を参照されたい。

### 3) 特別支援学校の地域支援体制の構築について

本講座は平成16年度、岐阜県の特別支援教育コーディネータ養成と歩調を合わせるようにスタートした。岐阜県の特別支援学校のセンター化への取り組みとしては、先に述べたように盲学校が先行していたが、この講座に教員が参加し研修を行うことが一助となって各特別支援学校での様々なセンター的活動が展開されている。

岐阜聾学校では平成17年度から「きこえとことばの支援センター」を設置して、盲学校と連携した巡回相談会「巡回きこえとことばの支援相談会」を実施している。盲学校の相談会と会場を共にした相談会では、近隣小学校の児童が視覚障害と聴覚障害の両学習会に参加することができ、両障害について理解を深めることができるという波及効果も見られた。

また、平成17年度には、岐阜市内にある特別支援学校5校（盲学校、聾学校、肢体不自由養護学校、病弱養護学校、市立知的障害養護学校）が、「岐阜市内盲・聾・養護学校5校連携研究会」を結成して、研究会の開催、市内小・中学校へのアンケート、5校啓発リーフレットの作成、研修会の実施等の活動を行っている。本講座では、今後ともこれら特別支援学校が関係機関と連携／協働的实践を通じて地域支援体制を構築することに関する内容を充実させていくことが大切であると考えている。

## V おわりに

本講座は、岐阜県教育委員会が大学に期待している、特別支援教育コーディネーターの実践力の向上を目指した継続的な研修の場となるように、主催者である大学スタッフと受講者である現場教師とが双方向で作りあげていくことを考えている（平澤・神野・池谷，2006）<sup>2)</sup>。

講座3年目の取組からは、講義や講演からの情報を踏まえながら、学校現場の実践を題材として、その事象を分析する枠組みを提供し、課題解決のために考え、討論する場を継続的にもつことが、受講者の見通しにつながるという手応えを得ている。大学スタッフの役割としては、学校現場との協働的实践を通じて、どのような条件を整備すれば、特別支援教育コーディネーターがその役割を遂行しやすいのかを明らかにしながら、それを講座の内容に反映させていくことが重要と考えられる。今後、受講者が課題解決に向けた手がかりを得て、実践し、それが成功し、その成功条件を講座で共有するような循環を作り出していきたい。

---

### (付記)

平成18年度特別支援教育コーディネーター実践講座は、著者全員で企画運営した。本報告のⅠ～ⅡとⅤは平澤紀子が、Ⅲは神野幸雄が、Ⅳは池谷尚剛が分担して執筆した。

### (文献)

- 1) 学校教育法等の一部を改正する法律（2006）平成18年法律第80号。

- 2) 平澤紀子・神野幸雄・池谷尚剛 (2006) 特別支援教育コーディネーター 実践講座の取り組み. 教師教育研究, 2号, 84-90.
- 3) 池谷尚剛・浅野紀美江・川崎保男・牧田京子・松井康樹・野原尚美・高橋宏子・宇佐見潤・藤野克己 (2004) 岐阜県における視覚障害関係機関ネットワーク活動の現状と課題ー岐阜視覚障害研究会の活動からみた特別支援教育ネットワークの形成ー. 岐阜大学教育学部研究報告人文 科学52 (2), 395-408.